

東日本大震災犠牲者の被災要因からみた「地域防災の課題」
——大槌町吉里吉里地区自主防災検討のための死亡状況調査から——

○岩手大学 麦倉 哲
岩手大学 梶原昌五
岩手大学麦倉研究室 高松洋子
岩手大学 和田風人

1 目的

この報告の目的は、岩手大学三陸復興支援・コミュニティ再建支援の一環として、成果の一部を報告するものである。本報告ではとくに、東日本大震災で犠牲となった方がた一人ひとりのことを記録に残すために、また亡くなった方がたの状況から、被害の社会的要因を社会学の視点から解明するために報告するものである。換言すれば、地域社会のもつ脆弱性と向き合い、被災地域社会が持続的であるための課題を見出す一助となるために報告するものである。

2 方法

対象となる地区の住民（被災時の住民）で、大震災の結果犠牲となった者（故人）の全数を対象とする、事例調査法に基づく研究である。まず対象者を確定するための調査を、各方面からの聴き取りや資料分析により実施した。対象者がほぼ固まった時点で、犠牲となった方の一人ひとりの被災状況について、関係者から聴き取り調査を行った。死亡された状況や要因は、関係者からの聴き取りによったので、それらに間違いがないかどうかについて、複数の関係者による点検作業を行った。最終的に、被災者の数を確定し、それぞれの犠牲者について、推定による被災状況記録と、死亡要因分類を行った。かくして、この地区における被災者全数の調査結果をまとめることができた。

3 結果

分析の結果、この地区においては、たぐいまれな避難行動、避難支援、救助・救命の活動が行われたことがわかった。被災された人々をぎりぎりのところまで助けようとした行動がみられた。次に、津波を過小評価した予報とも関連して、津波の被害を軽視してしまったことによるとみられる犠牲があった。また、海の作業小屋へ行くとか、家で片付け中とか、船や乗用車を気にしてなど、危険域へ戻らないしは避難途中であったとみられる犠牲があった。また、従前の被害想定や過去における高台移転との関連で、津波が自分の住宅箇所までは来ないと決めつけてしまった犠牲がみられた。この中には、少し高台の自宅から出なかった者や、海側の自宅から親戚縁者宅の少し高台の家へ避難したつもりの避難者（主観的には避難したつもり）の犠牲が少なからずみられた。さらには、障がいのある家族や要介護の家族を気遣って、あえて自分だけが避難するという行動をとらなかった犠牲者もあった。被害者の属性からみると、70歳以上の高齢者の割合が高いこともわかった。浸水域ぎりぎりの比較的高台側の犠牲者が多く、そこからは、林立する住宅により海が見渡せなかった。

4 結論

以上から、この地区では、地域社会に根づいた防災文化により、相当の減災効果が発揮されたといえる。しかしながら、被災犠牲者の調査結果から、この地域社会のもつ脆弱性が浮かび上がってきた。これまでの基盤整備や防災対策の想定がある部分では安心感を形成した。高齢者ならびに、障がい者・要介護者の家族が少なからず被災し、ここに脆弱性がみられた。逃げるのが困難なために、道連れとなったとみられる犠牲者がみられた。安全な場所から公式の避難所へ向かう途中で被災する例もあり、避難対策の再考が求められた。調査結果は今後、住民主導の防災計画策定に生かされることとなり、地区住民と岩手大学ほか専門家の協力により、引き続き検討が続けられている。